「森三郎の作品を読む会」通信　第８号

2013年２月　８日　発行
2014年２月26日　改訂

どなたでもいつの会でも参加できます　　森三郎刈谷市民の会　「森三郎の作品を読む会」

1月の「森三郎の作品を読む会」では、
「赤い鳥」一九三一（昭和６）年11月号初出作品
「かうもり傘」（「夜長物語」所収）
「三条中納言」（「夜長物語」所収）を読みました。

昭和６年11月号
表紙「野球」
画　清水良雄

「かうもり傘」

これは魔法使いのおじいさんの魔法のこうもり傘の話です。「一つ、二つ、三つ」と数えると、どこにいても自分の体が自分の家に帰ってしまい、五つまで数えると自分のいきたいところへいってしまう、七つまで数えると・・・。ところがこの傘をおじいさんが忘れたところから、愉快な話が繰り広げられます。最後には「みなさんも、もちぬしの分らないこうもり傘なぞを、手にとったりしてはいけませんよ。・・・」と結んでいます。

あれっ、これは「赤い鳥」昭和６年９月号の「赤いポスト」の「あなたがたの、どなたかのおうちへ、いつか、切手のない新聞がとゞいたことがありましたでせう？ありました？・・・・」という結びの表現と筆づかいが似ています。「赤いポスト」は（ファイルマンによる）と注書きされています。（「通信６号参照）

今回、この「かうもり傘」と酷似の内容の絵本が二種類みつかりました。そこには確かにファイルマン・原作とありました。ファイルマンの原作（一九二二年）も探すことができました。森三郎さんが当時どのような話に関心を示していたかが分かると思います。これについては別の機会に報告します。

「三条中納言」

この話は、三條中納言というやせっぽちのお公卿さまが、おかかえ医者に薦められて太るためにウナギとツバナを食べるところから始まります。ところが、それからはウナギが大好物になって、まるで相撲とりのように太ってしまい、立居にも不自由するようになります。そこで医者に今度はほどよくやせる薬を所望するのですが・・・。

さてこれは、もちろん「万葉集」の巻十六、大伴家持の歌、

石麻呂（いわまろ）に　われ物申す　夏痩（なつやせ）に　良しといふ物ぞ　鰻漁（と）りめせ

にヒントを得た作品でしょう。

「ツバナ」とは「ちがや」のことで、滋養強壮に効くといわれています。そして「万葉集」巻八には紀郎女（きのいらつめ）が家持に贈った「あなたのために春の野で摘んだツバナです。召し上がってお太りなさいませ。」という意味の歌もあります。

わけがため　わが手もすまに　春の野に　抜ける茅花（つばな）ぞ
食（お）して肥（こ）えませ

ところで、痩せるために医者が三條中納言に処方した薬の話から、タンザニアの民話「かしこいお医者のやせぐすり」（「子どもに聞かせる世界の民話」所収）を想ったという人もいました。そこから話はプラセボ効果（偽薬効果）に飛んだりしました。

一人で読むのとは違う話の広がりが感じられた一月の「森三郎の作品を読む会」でした。

次回予定　平成25年３月29日（金）午後１時～３時
３月は第５金曜日ですので、ご注意ください。
「夜長物語」（『赤い鳥』昭和７年２月号初出・森三郎童話選集「夜長物語」表題作）